

西穂高岳独標遭難者追悼式 追悼の辞

本日ここに、ご遺族の皆さま、同窓の皆さまをお迎えして、西穂高岳独標 遭難者追悼式を執り行うにあたり、亡くなられた十名の御霊（みたま）に対し、謹んで哀悼の意を表します。

今から五十七年前、昭和四十二年八月一日、松本深志高校二年行事として五十五名が参加した、西穂高岳学年集団登山前班において、登頂した生徒・職員四十六名が西穂の山頂を下り、ちよとど独標の昇り降りにさしかかった午後一時四〇分頃、激しい落雷に遭い、若き十一人の尊い命が失われてしまいました。安全であるべき学校行事の場で、このような事故が起きてしまったことをあらためて重大に受け止めるております。

志を立て、理想に燃えて高校生活を送る中で、多くの可能性を秘め、自身の将来を思い描いていたであろう当時の生徒たちに思いを巡らせるとき、痛恨の情が胸に迫って参ります。ここに十一名の先輩方の御霊に深く頭（こうべ）をたれ、魂安らかならんことを心よりお祈りいたします。

再来年に、創立百五十周年を迎える本校ですが、歳月が流れ、人が入れ替わっても、松本深志高校に在籍した者は、この悲しい出来事を決して忘れてはならないと考えています。

去る七月二十六日の終業式では、この事故について、報告書の写真や記載事項を引用しながら生徒たちに伝えさせていたいただきました。また、事故から五十年を迎えた折に信濃毎日新聞で掲載さ

れた特集記事を生徒職員に配信し、事故に遭遇された方々の思い、同期生の皆様の思いを共有させていただきました。また、ご遺族の方々が以前に述べられた言葉の中で、在校生に呼びかけていただいたものがありましたので、その思いを生徒たちに伝えさせていただきますました。ご遺族の思いにお応えするためにも、生徒たちが安心して、安全の下に、生命の営みを前向きに行うことのできる学校をつくることに、全力を尽くしていく決意です。そして、志半ばで春秋の身を散らしてしまった、痛恨の教訓を胸にし、次の代に引き継いでいくこと、そして、二度とこのような事故を起こさないと決意を新たにすること、県立高校における危機管理の重要性を本校より発信していくこと、これが今の深志に在籍している私たちに課された重要な使命です。

本日はOBOGの有志の皆様、本校山岳部の皆さん、さらには教頭、山岳部顧問が慰霊の登山を行っております。また今日のために千羽鶴を部活の仲間と折ってくれた皆さんもいらっしやいました。そして今日、ここにご参列いただいた皆様とともに、あらためて十一名の御霊のご冥福を心よりお祈り申し上げます。併せて、ご遺族の皆様方、ご関係の皆様のご健勝を心から祈念申し上げます、追悼の言葉といたします。

皆様方には、お忙しい中、ご参列いただき、誠にありがとうございました。ございました。

令和六年八月一日

長野県松本深志高等学校長

石川 裕之